



施設入所児童への対応

中央児童・障害者相談センター 児童心理司 浅野 毅

見相は虐待初期対応に忙殺され、施設入所児童の支援を施設にお任せしている現状があります。一方で、それでも時間を見つけて施設入所児童のために何かできることはないかと考えている見相職員は少なくありません。時間を増やすことはできませんが、質を高められる可能性はないのでしょうか。

見相と施設による施設入所児童への支援について、大事にしたい心構えを思いっぴきまに書き進ねてみたいと思います。

1. 施設入所ケースの特徴

まずは、施設入所している子どもやその家族がどのような特徴を持っているのかを振り返ってみたいと思います。

どんな子どもが生活しているか見てみると、乳児院や児童養護施設、里親等においても、心身障害や虐待経験のある児童が多数在籍し、児童の行動上の問題が表面化していることも珍しくありません。

一方で、当然ですが、子どもに心身障害や行動上の問題があっても家庭で養育している場合がほとんどです。

日本の子ども人口（0～19歳）は、平成31年4月時点で約2,100万人います。そのうち、社会的養護のもとで生活している対象児童は約3万5,000人ですので、子ども人口のほんの0.15%に過ぎません。

表「施設種類別措置児童数」（平成30年3月末時点）

乳児院	2,706人	自立支援	1,309人
児童養護	25,282人	里親	5,424人
心理治療	1,280人	ファミリーホーム	1,434人

一般的には、家庭そのものが抱える問題が大きい場合に初めて施設入所に至るわけです。単純に言えば、

施設入所ケースの特徴は、家庭も児童も抱える問題がそれだけ重たい、あるいは濃縮されたものだという事です。

2. 施設入所ケースに携わることの重み

次に、そういった問題が濃縮された施設入所ケースに関わる私たち児相職員や施設職員の役割や決定の重みについて考えていきたいと思ひます。それがいかに重たく、やりがいがあることなのか、4つの観点から考えてみました。

【1 過去からの分離】

1つ目は、施設入所により子どもはこれまで馴れ親しんだ世界が奪われるということです。

赤ちゃんにとっても、いつもの肌ざわり、いつもの温もり、いつもの匂いなど、世界がいつでも安定していることは心身の発達のために重要な要素です。ましてや物心がついた子どもたちにとって、大切な自分の家族や帰るとホッとできる我が家、いつも使っている持ち物、隣にいただけで楽しい気持ちでいられる友達、学校の中で与えられた机や椅子等、自分を取り巻く世界から突然切り離されてしまう喪失体験というのは、およそ経験者以外には想像が難しいほど衝撃的な出来事です。

【2 家庭養育者からの分離】

2つ目は、入所により親が奪われるということです。たとえ家庭で虐待を受けて育ってきたとしても、その子どもの中で親が特別な存在であり続けることが多いことは支援者にとって、経験的にも理解されやすいことだと思ひます。このことが、私たちをもどかしい気持ちにさせることもしばしばあります。しかし、子どもにとって自分の出自の原点である親を重要視する



ことは、イコール自分の存在にOKのハンコを押せるかどうか（自己肯定感）の根っこに関わる部分なので、「どんな親でも大切」というのは無理のないことです。

その親を奪うことになるのですから、家庭養育から切り離されるだけでも、私たちが重要だと信じて止まない自己肯定感を揺るがしかねない大ごとなのだと思います。しかも、「親と家庭で暮らした過去」からの分離というだけにとどまらず、結果として「親と家庭で暮らす未来」まで奪ってしまうことさえあります。

.....

【3 “真のニーズ”の理解】

3つ目は、子どもの“真のニーズ”は、時に子どもが言葉にした願いをも超えてしまうということです。

私たち支援者は、言葉では表現されない児童の“真のニーズ”をつかむことが求められます。例えば、子どもが「家に帰りたい」と言ったとき、その願いをかなえることは「子どもファースト」なのでしょう。「当然でしょう」と言われるかもしれません。では、帰りたいというその家庭が日常的に暴力であふれているとしたらどうでしょうか。必ずしも、子どもの願いをそのままかなえることが「子どもファースト」とは限らないということが簡単に分かります。

子どもの願いに反してでも措置を続けるという選択をすることがあるのは、児童福祉法の中にある「児童を心身ともに健やかに育成する責任を負う」という大義名分があるからです。「たとえ子どもの願いが「家に帰りたい」であっても、心身の健やかな育成のための真のニーズは措置を続けることだ」と、私たちはある意味勝手に決めつけているのです。これはある意味では非常に恐ろしいことなのかもしれません。

.....

【4 子どもの未来を削っている】

4つ目は、施設養育など社会的養護というのは、子どもの未来をつくる行為にはかならないということです。

ただ18歳になるまで不自由なく生活してもらうことが目的ではなく、家庭復帰や自立までに、良質な体験をできるだけたくさん用意したい、退所してからの糧

にしてもらいたい、というのが大人側の願いだからです。実際、私が「どんな施設にしたいですか？」と施設職員にうかがった際、「社会に出てから困らないように」という枕詞とばかりで話し始める先生方は少なくありませんでした。

誤解を恐れずに言えば、私たちは、施設入所により子どもが大切にしている過去や未来を奪い、「児童の心身の健やかな育成」という大義名分の下、時に子どもの願いさえも二の次にしてしまうことを余儀なくされます。何より、1人の人間の未来をつくっているということと思えば、見相や施設の職員1人1人が担う責任の重さとやりがいにあらためて気付かされるのではないのでしょうか。

3. 施設入所児童支援推進委員会の活動

平成26年度に安全委員会方式導入推進委員会が設置され、県内の手を挙げた施設と協働してより良い安全委員会方式の導入と運営を目指しました。その後、平成27年度には施設支援検討委員会に、平成30年度には施設入所児童推進委員会に名前を変え、活動内容や対象を拡大してきました。

表 施設入所児童支援推進委員会の活動 一部抜粋

	活動
施設との協働	課題抽出、ルール整理、マニュアル整備、勉強会、安全委員会方式の運営等
見相への浸透	マニュアル策定・更新、職員研修

このように取り組みの変化こそありました。決して変わることはない、考えの中核があります。これは、施設との協働する際にも、見相への浸透を図る際にも大事にしたいと思っている考えです。

.....

【1 安全を最優先に考えること】

どの子どもにも共通して必要なのは「安全を守られる体験」です。これは多くの支援者にとって当たり前の中で、「暴力は心身の健全な育成を阻害する」という考えがあるからこそ、子どもの意に反してでも被虐待児の入所措置を継続しているわけです。



世界（外界）への信頼感、自分の人生をコントロールできる感覚、傷つきに対する回復力、目標への推進力や持久力、気分の安定性といった自立までに必要な力は、全て安全という土壌の上に育まれるものです。

【2 矢印の方向をそろえること】

入所児童の支援を難しくしている要因は、「子ども1人1人が多くの困難を抱えているから」というだけではありません。むしろ、彼らが集団で生活していることにこそ難しさの本質はあると思います。

一般的に、集団心理は、自分が強いパワーを持っていると錯覚させたり、罪の意識を分散させたりします。その結果、自分らしさを埋没させ（没個性化）、モラルハザード（道徳性の低下）や思考の単純化、感情の波の激化などが起こります。

児童福祉施設でいえば、子どもは自分の人生のコントローラーを取り戻すべく、無意識にパワーを求めめるため、簡単に集団化しやすく、大人への反抗という形で結束すれば、大人側の言葉に一切耳を傾けなくなる「ぼくらの七日間戦争」の状態になります。

児童らが集団化しようとする一方で、大人側はしっかりとOne-Teamで対応できているかといえば、難しいことも多いです。子どもは無意識のうちに大人を分断化（スプリット）することが多くあります。例えば、A先生の前では「いい子」でいてB先生のことを悪く言うことでA先生からの愛情を得ようとするような状況です。A先生がこの構図をきちんと理解していれば大きな問題には発展しませんが、こういった場合、「こんないい子なのにB先生の対応はちょっとな…」という考えに陥りやすく、結果として、A先生とB先生の仲を裂いてしまうわけです。もちろん、彼らにとっては分断化が目的ではなく、必死に愛情を得ようとしているだけであり、過酷な日常を生き残るための手段だと考えられます。しかし、意図的でないにせよ、結果、大人が分断化されてしまえば、集団化した子どもたちと対峙することはより難しくなります。

だからこそ、必要なことは大人たちが同じ方向を向くことだと思います。みんながある程度同じ方向、同

じタイミングで力を込めなければ、綱引きで勝つことはできません。矢印の方向をそろえることは簡単なことではありませんし、「100%同じ」である必要はありません。「大事な部分はある程度合わせる」という感じでしょうか。

4. 施設と児相の協働

「協働が大事」という言葉はありふれています。しかし、それはとても有り難いことです。かくいう私も、自分の行動も顧みずに失礼なことを言ってしまった失敗がありますので、ここからの続きは、これからの自分にも向けて書きたいと思います。

一体どうすれば望ましい協働ができるのでしょうか。あらためて考えてみると、「協働のためには目的や責任の共有、対等な関係性、違いへの尊重が必要で、それによってお互いの凸凹を補い合い通常以上の成果をもたらす」というのが協働の本質になるでしょうか。

こういった関係は、簡単に手に入るものではなく、時間をかけて泥臭く作っていくものだと思います。施設と児相の関係で言えば、子どもの“真のニーズ”達成のために、何度も対話を続けることでようやく生まれるものだと思います。その際、敬意を持つこと、知ろうとすること、何よりも、主体性を持つことが重要だと思います。つまり、相手にお願する以前に自分が何ができるのか考え、言葉にして、行動で示す努力を継続していく姿勢が協働につながっていくのだと思います。

5. まとめ

施設入所児童に携われる重みとやりがいを味わいながら、職員1人1人が自分にできることを主体的に考えて行動する。それは簡単なことではありませんし、くじけそうになることの方が多いかもしれません。しかし、それでも大人たちが一致団結して、支え合いながら生き生きと仕事をしている、そういった姿を目にできることは、施設入所児童にとって貴重な体験なのではないかと思います。